

第3回岩手競馬経営の将来方向検討会議 会議要旨

1 日時

平成23年1月24日(月) 13:30～16:00

2 場所

岩手教育会館 2階 第1階会議室

3 出席者(委員8名、構成団体6名、県競馬組合4名、厩舎関係者4名)

(1) 委員

座長 藤井 克己 岩手大学学長
職務代理者 八木橋 伸之 弁護士
委員 雨宮 敬徳 地方競馬全国協会副理事長
委員 及川 富美人 水沢信用金庫理事長
委員 荻野 洋 (株)日本レストランエンタプライズ取締役会長
委員 加藤 久智 (株)IBC 岩手放送ラジオ放送部専任部長兼アナウンス部専任部長
委員 倉原 宗孝 岩手県立大学総合政策学部教授
委員 下田 栄行 公認会計士

(2) 構成団体・県競馬組合

- ① 岩手県：小田島農林水産部長、松岡競馬改革推進室長、菅原競馬改革推進監
- ② 奥州市：栗野総合政策部参事兼競馬対策室長
- ③ 盛岡市：川村副市長、鷹觜競馬組合経営改善対策事務局長
- ④ 県競馬組合：高前田副管理者、大友事務局長、平野経営管理部長、小野業務部長

(3) 厩舎関係者

- ① (社)岩手県馬主会 山本 武司 会長
- ② 岩手県調騎会 熊谷 昇 会長
- ③ 岩手県調騎会騎手部会 関本 淳 副会長
- ④ 岩手県厩務員会 工藤 裕孝 会長

4 会議の概要

(1) 開会

菅原競馬改革推進監の進行により開会

(2) 厩舎関係者との意見交換

菅原競馬改革推進監から、検討会議でこれまで出された主な意見について、資料1により説明。

座長：厩舎関係者の皆様から、岩手競馬の現状、発売額の向上など経営改善に向けた意見や、この検討会議において特に検討が必要と考えられる事項について要望等をお聞きする。それでは馬主会から願います。

馬主会：馬主会の状況を説明する。今日現在、会員は約450名で、県内が130名、県外が320名。また、現在馬を登録をしている人は、県内90名、県外170名。1年間のうち、1回持てば良いというルールなので、出入りはあるが、そうになっている。

過去には、800人くらい馬主がおり、うち県内が500名くらいという時代もあった。県内の馬主であれば、自分の馬が走る時に競馬場に来ることもあるが、今は映像情報が非常に発達しており、家でも見られるので、なかなか競馬場に足を運ばないというのが現状。

馬主の収入であるが、出走手当が、1回出走すると6万9千円、普通の馬は1か月に2回、2週間に1回のペースで走るのので、13万8千円入る。また、毎週走る馬が、岩手には200頭くらいいるが、そういう馬は1回出走すると4万4千円なので、4週走って17万6千円。普通であれば17万6千円ないし13万8千円の手当が入る。しかし、出走希望頭数が多い場合、抽選で漏れることがあり、6万9千円もらえる馬が外れると、1万円しかもらえない。これを1年間通すと、1頭当たり80万から100万円の赤字が発生し、10頭持っている、1千万円の赤字となる。

馬の購入代金は、岩手県の場合、新馬で200万円から300万円が多い。このような血統の馬では、大きなレースに挑戦してもなかなか勝てない。馬主会が1頭当たり100万円を補助する事業を活用した馬が14~15頭あるが、去年は90頭余り新馬がデビューしたが、1千万円と900万円の馬が岩手県の1等、2等を取っている。

スターホースを作るには、ある程度血統の良い馬を持たなければ全国的に太刀打ちできないが、岩手の今の賞金体系では、300万円以上の馬を買って元を取るのはかなり厳しい状況。先程の1千万円の馬は、重賞まで全て1着を取っているが、馬代までまだ追いつかない。今年もう一回走って、ようやく1千万円回収できる。こういう状況では、なかなか新馬に手を出す馬主がいない。南関東の馬は500万から1千万円、中央競馬はピンからキリまでであるが、ダービーに出るのは4、5千万円。1千万円くらいの馬では余程のことがなければ出られない。

過去にはコスモバルクのような馬も出たが、確率的にはハイセイコーやオグリキャップと同じ。300万円、400万円の馬で南関東や中央競馬に挑戦しても、せいぜい9着、10着が精一杯。

将来を考えていくにあたっては、単年度の収支均衡にとらわれず、思い切って3年後、5年後のことを考えてほしい。330億円問題のときに、翌年度から単年度の収支均衡が条件で、基本的に1円でも赤字なら廃止というルールが決まった。施設の耐震問題など様々な部分を手当した上での単年度の収支均衡なら良かったが、次の年から厳しい状況が続き、コストは削減の一方。委員には、様々な情報をもとに、3年、5年先を考えてほしい。馬主会、調騎会、厩務員会、そして競馬組合の四者で一生懸命やっているが、頭だけ使ってもなかなか難しい。今までお金のかからないことは全てやっている。しかしながら、お金のかかることをやると赤字になるという状況。それを踏まえて、何年か先を見据えた計画を出してほしい。我々四者もそれに対して一生懸命頑張る。

座長：続いて、調騎会にお願いします。

調騎会：私どもの団体は、調教師40数名、騎手20数名の70名弱で構成。我々の業務は、会員の福利厚生、相互間の諸問題の解決、主催者との運営、業務上あるいは番組等の色々な協議。

厩舎の現場として、一番危機感を持っているのは、馬資源の確保。全国的な生産頭数の減少も影響しているが、やはり、賞典費の下落により、馬主に対し、素質のありそうな馬や、中央で実績のある馬など、値の張る馬は非常にセールスしづらい。先ほど馬主会が言ったように、新馬を購入しても1年では代金を償却できないので、どうしてもちょっとレベルの低い馬しか勧めることができない。古い馬でも、中央競馬で未勝利馬の何十万円単位の馬しか勧めることができない。したがって、なかなか岩手ならではのスターホースも育たない。

賞典費等が抑えられており、我々の経営は悪化している。しかし、330億円融資を考えれば、

経営努力で吸収していくしかない。そのことについて、あまり声を大きくして言うつもりはない。

もう一つ、新聞紙上等で廃止前提の記事や、半分以上の方が岩手競馬はなくなっても良いというアンケート結果が出ている。それは正直なところであろうが、我々にとっては非常にやりづらく、モチベーションが下がる。沈む方向にどんどん行ってしまって、意気盛んになれない。

しかしながら、そればかり言っている状況でもないのです、我々も頑張っている。全国の地方競馬の入厩率は約 75%が平均値であるが、岩手競馬は、昨年、大体 85%くらいで推移している。全国平均から見ると、なかなか頑張っていると思う。

長期的な見通しがあれば、アナウンス効果もあり、大分違うと思う。先般、岩手競馬と同じく経営が厳しく、相当累積赤字を抱えている北海道競馬では、北海道知事が「3年は継続する」と発表したときには、やはり地元の生産者やオーナーに非常に活気が出たと聞く。ぜひ、そのような見通しを示していただき、我々も元気が出るような方策を検討していただきたい。

座長：引き続き、調騎会騎手部会にお願いします。

騎手部会：騎手は、平成 18 年には 31 名いたが、現在は 23 名。去年新人が 1 人入ったが、今後の予定はなく、他の競馬場から移籍の予定もない。これ以上減ると、大変なことになる。

減少の原因は、収入の安定の問題。地方競馬の場合、中央競馬と違ってフリー制度はなく、騎手は厩舎に所属し、調教師に雇用されている。給料は大体 15 万円くらい。あとは歩合があるが、乗ってなんぼ、勝ってなんぼの世界。賞金や手当が下がり、上位の者でないと生活が大変。

しかしながら、現状では、手当を上げてほしい、賞金を上げてほしいというのはちょっと無理だとも思う。何とか現状維持でやっていけたらと思う。

座長：最後に厩務員会にお願いします。

厩務員会：厩務員会は、資料では 158 名となっているが、1 月の競馬終了時点から休業となっている人もおり、現在 140 名くらい。我々としても岩手競馬の廃止だけは何としても避けたい。厩舎のコスト削減などでリストラが相次いでおり、厩務員の持ち馬頭数も多い人で 7 頭、8 頭になる。

頭数が増えても、増えた分の賃金をもらえないでいる厩務員もいる。また、自分の担当馬を出走させた場合、6 頭目以降の着外手当や入着賞金を主催者からももらえないでおり、厩務員会からも働いた分の手当だけは何とかもらえないかと主催者に申し入れている。

給料も日割りで、月 29 日くらい出勤して、14 万円くらいしかもらえていない人もいる。開催のない冬期間に、休業している厩務員もいる。我々厩務員としても、岩手競馬の存続のためには協力を惜しまない。厩務員の現状を理解されたうえで、検討をお願いしたい。

座長：厩舎関係者 4 名から発言いただいた。ここからは委員との自由な意見交換とする。

委員：主催者からももらえない手当とは何か。そのようなことがあり得るのか。

厩務員会：6 頭、7 頭持っている厩務員も何人かいるが、5 頭目までは引き馬手当や着外手当、入着すると着順に応じて手当が入る。しかし、6 頭頭目以上の着外手当と入着賞金はもらえていない。

競馬組合：厩務員が扱う頭数は、一般的に 3 頭が望ましい。時間的に厩務員 1 人が朝の作業で馬の手入れ等をするのは、3 頭が限度と言われている。預託契約の積算でも、厩務員 1 人あたり 3 頭を扱う計算で預託料が積算されていると聞く。

現状として、厩務員の数が減り、1 人で 6 頭、7 頭持っているという実態はある。我々としては 3 頭持ちが基準と考えているものの、実態にそぐわないので、5 頭まで制限を緩和している。したがって、厩務員名簿で、1 人あたり 5 頭の馬を持ち馬として名簿を提出していただき、その馬が出走した場合には、定められた手当を支給している。6 頭以上は登録を認めていないので、

支給の対象外というのが実態。規定で出すべきものを出していないということではなく、あくまでも厩務員は一人5頭持ちが限度であり、それを超えた場合は、厩務員の持ち馬とは認めていないので、支給しないという考え方。

委員：馬主からいただく預託料には厩務員の給料も含む。一般に、厩務員1人で3頭持ちなら十分な管理ができると言われるが、現実問題として、預託料もどんどん下げられており、給料も下がる。だから、厩務員は3頭持ちでは生活できないので、5頭から、6頭、7頭持ちが現実ということなのではないか。厩務員も少なくなり、担当馬がどんどん増えているのではないか。その辺の現実的な問題と、手当の額の問題は、分かったようでよく分からない。

競馬組合：1人の厩務員が6頭、7頭扱っているのは実態。それに合わせて手当を出すのも一つの考え方だが、一方でそれを主催者として認めてしまうと、厩務員が少ない実態が、なかなか改善されない。つまり、主催者が手当を出すことによって、経営者である調教師が厩務員を確保する、集めるという努力を怠る可能性も考えられる。主催者としては、本来である3頭持ちを守ってもらうため、厩務員を確保しなさいと。厩務員1人あたりの頭数を際限なく認めるのは、厩務員が少ない実態を奨励するということにもなるので、今の形を取っている。

委員：厩務員は3頭持ちが理想的だとこだわる気持ちは分かるが、現実的には無理。南関東でも、大井が1人2頭、ほかの3場は3頭なり4頭でやっと生活できる。南関東以外の厩務員は、大体5頭以上。岩手の場合は、水沢と盛岡合わせて7百数十頭というのは変わらない。馬の頭数から必要な厩務員数はおのずと出てくる。払うべきものが払えない現実と、公正確保という理想論の差は、厩務員側には理解されていないのではないか。だからこそ、毎年のように要望を出される。馬の頭数に対して必要な厩務員の手当であれば、支出全体で調整して支払うべき。

馬主会：馬主会としては、3頭持ちが理想というのは、数年前からの話。でも、現状では4頭持ちも止むを得ない。厩務員1人で6頭、7頭持ちというのは、今日初めて聞いた話で、公正競馬が確保できるか疑問。先ほど委員は700頭と言ったが、実際には650頭くらい。厩務員の数は150人を切るくらい。そうすると、厩務員1人4頭持ちとして、あと50頭だから、単純平均で4頭ちょっと持ち。その状況で、1人で7頭、8頭持っているというのは、あり得ない数字。150人全員5頭持ちにしても750頭で、現状より100頭オーバー。特定の厩舎の事情が何かあるはず。ほかの厩舎では、5頭持ち6頭持ちをやっている厩舎は少ないと思う。手当を5頭で打ち切るという話も今日初めて聞いたが、本来なら出走を制限すれば良い。5頭までで手当を打ち切るくらいなら、6頭、7頭、8頭目の馬は出走させないと組合が言えば良い。ところが、馬資源が足りない現状から、レースができなくなる問題が生じる。現に6頭、7頭立てのレースもある状況。したがって、目をつぶっているのが今の競馬組合。私としては、岩手は公正競馬を守っていることが自慢なので、このようなこともしっかり対応しなければならない。

委員：平均で考えるということは分かるが、厩務員の事情や能力の差もある。一概に全ての厩務員が4頭から5頭を管理する能力があるとは言えない。結局、手当の問題で人数を制限するのは、調教師の責任ではないのか。厩務員がどうこうではなく、調教師が、公正競馬のために5頭以上は任せられないとか、6頭で抑えるとか、その辺のさばき方はどうか。

調騎会：厩務員1人に、あまりに多頭数任せると扱いが粗末になる。そうすると馬主の信頼を得られず、馬を任せてもらえない。経営者としての調教師の判断で、厩務員1人で6頭も7頭も管理させる場合もあると思うが、一方で、馬を良い状態に保つために、頭数を抑える者もいる。単純に言うと、1人で多頭数管理させた方が調教師の収入は良い。それでは馬主の信頼を得られな

いという調教師は当然、厩務員もある程度抱える。そこは経営者としての判断。

実際は、多頭数を管理している者の方が収入は多い。調教師が4頭以上持たせない厩務員と、5頭、6頭でもやってくれという厩務員を比較すると、当然、少頭数の者が収入も少ない。

座長：そうであろうが、本来であればもらうべきものがもらえていない。

調騎会：そのような歯止めがないと、調教師は厩務員を解雇しかねない。330億円融資の際も、雇用を確保する必要性について議論があった。雇用の安定や、経済波及効果も謳われたわけだから、我々も、自分の収入はさておいて、厩務員の雇用の安定についても当然考えるべき。

委員：今後、岩手競馬をどうすべきか、我々委員も様々検討しているが、一番大事なのは主催者と馬主と厩舎関係者の思い、方向性だと思う。このような小さな問題でも、主催者と調騎会と厩務員会が話し合うべき。主催者が思う公正競馬のあるべき姿と実態は全然違うのだから。経済的な理由が大きいと思うが、共通認識を持つためには、話し合いが必要。調教師も入って話し合い、厩務員も納得するようにしないと、明日の岩手競馬は語れない。ぜひ、明日からでも取り組んでほしい。検討会議でも様々発言するが、馬主会や調騎会がそれぞれ意見を出し合っていくべき。

委員：会社経営と一緒にあり、労働者の労働条件が低くなってはいけない。やる気がなくなつては困るので、ぜひ調整をお願いしたい。

騎手部会の方に聞きたいが、中央競馬と地方競馬の制度の違いでフリー制度の話が出たが、地方競馬もフリーであるべきだと考えるか。

騎手部会：騎手としては、フリー制度は困る。

委員：共同トータが稼働し、中央競馬との相互発売が始まるとき、中央競馬のPATシステムに乗せられるレースをいくつ確保できるかが課題。岩手競馬のグレードレース3つは売れると皆言っているが、そのほかに、例えば、賞典費総額が同じとして、レース数を減らす、もっと極端なことを言えば、開催日を減らしても、中央競馬で売れるレースを増やすという考え方は、現場として受け入れられるものなのか、難しいものか。

馬主会：今は130日程度開催しているが、採算が取れる日は3分の1もない。今は土日月の3日開催であるが、土日開催か1日開催か、まず収支を検討して、1番良い日に開催すべき。

グレードレース3つ以外に中央競馬が岩手競馬の馬券を売ってくれれば、全国的に売れるレースだろうから、岩手が4つ、5つ、6つと参入するのはかなり難しいのではないか。結局、南部杯などが中心になるだろう。

レースを削るのも、土日月3日間開催のほか、奥州・盛岡どちらかは別として、本当に競馬を残すためならば、一場制も本気で考えなければならない。水沢なら、スタンドの建て替えや厩舎の建て替えなど、10年を考えればすごい投資になる。盛岡なら、馬房数の問題があり難しい。生き残るためということになれば、本当にそれがベストなら、馬主会としては賛成する。

委員：レース数の見直し云々は、今までの議論の一部。今のままやってほしいという考えがある一方、お金がないことも事実。それで3年、4年やっていくと、自然消滅するしかなくなる。現場の人たちのモチベーション、苦しいが頑張れば儲かるというような仕組みに変えていくことができるかどうか、研究しなければならない。将来の方向性を考えるとき、今のままではダメだという共通認識は全員にあると思う。どのような形なら、将来プラスにできるかというのは、現場の人たちを交えて考えなければいけない。

馬主会：レース数にかかわらず、馬が走るのは2週間で1回。なので、レース数が減れば、頭数

が減る。調教師も、それに応じた数になるし、厩務員も、それに合わせた数になる。騎手も、乗る回数が少なくなるので、収入が減る。その中で、力のある騎手が残り、弱い者は負けて、失業していく。それは仕方がない。優勝劣敗の考えからすればそうなる。

では、誰がそれを冷静に、数字を示して考えるか。今まで競馬組合に対して、廃止になったらいくらかかるかなど、色々お願いしているが、それはできないと言う。競馬組合ができないなら、構成団体が数字を精査し、今ここで止めたなら大変なことになるということも示してもらい、それを理解したうえで次に進まなければ。今ここで委員と話をしていることは、4月1日には間に合わない。6月頃に提言をまとめると聞いているが、それでも来年の4月から実行できるかは疑問で、もう1年くらいかかると思う。とにかく早目早目に提案を出してもらいたい。我々も全面協力する。構成団体がリーダーシップをもって、1年でも早く実現してほしい。

座長：これまでは単年度の収支均衡が前提だったので、将来を見据えた計画ができないという事情もあった。この検討会議では、何年か先を見据えて手立てを考えるということであったので、その検討を急ぐ、ということになるのだと思う。

委員：利益をみんなで薄めるのが良いのか、絞っても良いのか、現場の意見を聞かせてほしい。

調騎会：試算したことがないが、従業員の生活の安定を考えれば、やはり薄くても良い。同じ厩舎内での格差は、経営者としても作りたくない。

委員：先ほどの馬主会の話であるが、薄めるか、濃くするかについては、早く結論を。淘汰も時には必要。騎手部会としてのご意見は。

騎手部会：騎手の方では、馬主会の言う優勝劣敗も分かるが、現状で既に23名という人数になっているので、ならしてもらう方を望む。

座長：開催日が減ると自動的に収入が減る。また、優勝劣敗となれば、どうしても差が出てしまう。厩務員会としてはどうか。

厩務員会：厩務員会としても、これ以上開催が減ると頭数が減り、厩務員のリストラも増えてくると思うので、現状の開催日数が望ましいと考える。

委員：先ほど、馬主会から、一場体制のお話があった。私も今の形での二場体制は、あまり将来性が無いと思う。いろいろと段階的に、工夫する方法があると思う。

一方で、アピールする点として、盛岡競馬場には日本の地方競馬で唯一の芝コースがある。芝コースの存在意義を現場の方々はどのようにお考えか。馬主会から伺いたい。

馬主会：岩手に芝コースができたことは、JRAとの繋がりが強かったことによる。その時代、岩手は、テレトラックの開設や、佐賀や荒尾でも発売するなど、最先端の取組をしていた。地方で唯一の芝コースを作る、芝レースを実施することでJRAに挑戦する、ということであり、それは新馬が集まっている時の話であった。

芝コースについて四者会議で話し合った結果、岩手から芝コースを無くせば、特長を一つ無くすことになる結論。また、今40数レースあるJRA認定競走のうち、10レース余りは芝コースがあることを理由に配分されているもの。仮に芝コースを無くすと認定レースとして一着賞金150万円のレースが10数レース減ってしまい、2歳新馬を買う馬主がまた減ることになる。そういう理由で、コース管理や裁決にお金がかかるとはいえ、芝コースを残すべきという結論になった。来年度の方針は来月8日の四者会議で議論するが、芝レースを実施する前提の議論になると思う。もし、芝を止めなければ岩手競馬は来年度開催できないというなら、受けるしかない。ただ、中央の馬主でも、馬の芝コース適性を見るため、岩手にとりあえず1回置く人もいる。芝コ

ースがあれば、岩手からダービー馬が出る夢も、可能性がある。

委員：調教師の立場からは、芝コースの意義はどうお考えか。

調騎会：芝とダートでは馬の痛み方が違うが、一方ではファンを惹きつける要素もある。

委員：芝があることによってダービーに挑戦するといった面もあるし、JRAの認定競走の割り当てでも増やしてもらえると良い面がある一方、コストの面の負担はどうか。逆に重荷になっている部分は無いのか、その辺りのことをお聞きしたい。

馬主会：基本的には、組合の考え方は経費の問題。

委員：ハイセイコーもオグリキャップもダートから出てきたことから、芝が無くても強い馬は出ると思うが、馬主の立場から、地元岩手の芝コースで馴らしてダービーを狙うということや、JRAの認定競走の確保など、いろいろな要素があるということか。

座長：一場体制についてもご意見を伺ったが、他に何かあるか。

委員：今日は現場の方々から有意義な意見を聞くことができています。従来も競馬組合と実務の関係の方々で、コスト調整の際には、いろいろと話し合いがあったとは思いますが、いわゆる岩手競馬の経営に関して意見交換する定期的な機会はこれまでであったか。

馬主会：年に4回くらい、四者で2時間くらい話し合っている。過去においては全く機会がない時もあったが、330億円問題以降、組合もかなり話を聞いてくれるし、細かいことまで話をしている。お金の面で厳しいことは承知しており、その中で、よくやり繰りしてくれているとも思う。

岩手競馬は、出走手当は地方競馬の中では良い方。それは馬主会として、出走手当に重きを置いてもらいたい、賞金よりも馬を集めたいという考えがあるから。そういうところも今の組合は100%耳を傾けてくれて、できることは全てやってもらっている。

委員：今日の馬主会のお話でも、良い馬を買うためにはある程度の投資が必要とのこと。少ない投資で集まってくる馬ではレベルが上がらないので、先行投資が必要ということは、競馬組合からの話では認識しておらず、今日初めてやっぱりそうかと認識した。

今までの会議では、売上げが上がらないのでどうしようという話を中心。現場サイドとして良いレースをするためとか、良い馬を集めるためにどうしようという話がなかなか無かった。今日はそういった意味で良いきっかけになったのではないかと考える。

座長：先ほどのお話を伺っていると、血統が相当支配的なものなのかなと思う。

馬主会：ディープインパクトという馬は、種付け料が今年は1千万円で約200頭に種付けする。母馬がグレードレースの桜花賞などのGⅠ～Ⅲの勝馬の場合は9割方走る産駒が出るが、岩手のチャンピオン牝馬にディープインパクトを種付けしても、走る馬が生れる可能性は1%前後。結局、金額が高いということは血統が良いことなので、種付け料が1千万円の馬の産駒は、普通は牝馬で5千万円くらい、牝馬で安くても2千万円する。そういう馬がダービーとかオークスに出走できる可能性は9割ある。

ところが、岩手競馬では、1千万円の馬が大きなレースを全部勝ったが、それは1千万円の馬を買える余裕がある馬主が買った馬。その前の年に岩手競馬のチャンピオンを持っていたので買った。その馬主は今年も勝ったので、来年も全部勝つチャンピオンの馬を買えるだろう。

座長：馬主の中でも優勝劣敗というか、2極化が進んでいくということか。

馬主会：650頭いる馬のうちで黒字になるのは、2歳の牝馬・牝馬、3歳の牝馬・牝馬、古馬の牝馬・牝馬の6つのカテゴリーのそれぞれのチャンピオンだけ。残りのほとんどの馬は赤字。

夢を持って100万円の馬を買っても、やっぱりそれなり。

委員：商品価値、すなわちレース一つ一つの価値をどう高めるかという議論が馬主会から初めてお話があった。

座長：やはり良い馬を、スターホースを育てるということか。

委員：馬主会のお考えは、要するに少数精鋭のようになってくるということか。

委員：今まで、売上げが計画に届かず、かなりコスト調整をしてきたと思う。賞典費も削減されているが、我々で言うと自分の商品を傷つけるようなものではないかと思う。魅力が減ると常々思っている。今年も多分そういう局面があると思うが、どこまでそれぞれの部門が対応できるのかということについて、お聞きしたい。

馬主会：馬主は、採算が合わなければ今日で止めます、で済む。賞典費を下げた時点で、翌日処分してくれと言えるのが馬主。馬主会は、四者協議で「このくらい賞典費を下げなければ来年は開催できない。」ということなら「止む無し。」という結論を出す。その際、一着賞金と出走手当のどちらを厚くするかということは組合との話し合いで決める。

ただ、出走手当の減少で、厩務員の生活がかなり苦しくなっているのは事実。盛岡市の平均賃金の半分程度しか貰っていないと思っているし、先ほどはびっくりしたが、日雇いのように雇っているという話もあった。やはりそれでは公正競馬ができないので、ある程度の収入は確保しなければならない。

コスト調整が生活に直結するのは、馬主以外。馬主は採算が合わなければ、採算の合う競馬場に馬を持っていくのが基本なので、九州やその他の競馬場に持っていくことができる。そういうことから、コスト調整の場合、組合はここ一年間は賞典費を絶対下げない方針で来たが、ついに昨年9月に調整対象となった。組合の下げたくない気持ちも十分理解していたので、止む無しということで受けた。とにかく、賞典費を減らせば減らすほど馬の価値が下がるというのは事実。

委員：質問の趣旨は、賞典費が南関東のようなところ以外は高い率になっている一方、岩手競馬はかなり低い率になっているので、これ以上減らせば大変だと思ったところ。賞典費については、今までと違う方向性で議論しなければならないのではないか。

馬主会：預託料が、岩手は装蹄料、獣医師代込みで月18万円くらい、南関東は月35万円くらいで、JRAは月60万円くらい。ところが、JRAは月60万円でも、月に1回走れば赤字にならない。南関東は、やっぱり勝たなければというか、着に入らなければ赤字。岩手は、下のクラスでたまに勝っても全然足りない。一番上のAクラスは一着賞金が52万円なので、毎月勝って52万円入ってくれば黒字。2か月に一回くらいでは赤字になる。結局、岩手の弱小馬主は馬を持てなくなる。

どうして岩手競馬が成り立っているのかというと、4万4千円の出走手当を毎週走って得ている馬がいるが、その馬主は30頭くらい持っている。30頭くらい持って、馬が出走するだけで1~2万円の利益が上がる。その馬主は全国的に200頭くらい持っており、毎月最低200~500万円くらい利益が上がる。これは最初に考えた人の勝ちで、いかに安く馬を持って走らせるかということ。これが今の岩手競馬の現状。岩手競馬で来年4月に出走手当を1万円下げたら、30頭持っている馬主は4~5人いるので、そういう人たちが一斉に他の地区に全部馬を移す。そうなれば、4月に岩手は馬が200頭減少する。

大井競馬に挑戦するクラス、新馬からAクラスまで上がっていくような馬は100頭のうち5頭くらい。2歳で走った馬で3年後に6歳まで岩手競馬で走っている馬がいるかどうか。駄目なら捨てられてしまう。それでは岩手競馬はもたない。スターホースが出ないのは、2~3歳の時まで

に、償却分くらい回収できていて、4歳の時にはいろいろな所に挑戦しに行くという余裕が必要だが、現実には無理なので、3歳になったら南関東に移籍させるとか、JRAに移籍するとかで、そこそこ走る馬は全部いなくなる。賞典費がちゃんとしていけば誰も外には出さない。

かつて、どうせ駄目だったら一回賞典費を上げてみよう、賞典費を倍にしてみて、これで売上げがうまく伸びなければ、やはり競馬を止めるべきだと話したことがある。何もしなければ売上げが毎年10%ずつ下がり、来年度もう一回、一所懸命やりましょうと言っても、また4月の1週目に売上げが10%下がり、やっぱり途中でおかしくなってしまう。どこかで一回ちゃんと対策を打って、それを全国に発信する。勝負をかける年、最後の年になるかもしれないが、それくらいの発想が必要。知恵だけでは岩手競馬はもうどうにもならないと私は思う。

委員：今のお話にも関係するが、先ほど、長期的な展望がないと駄目だということや、単年度の赤字で即解散であれば強い馬も買えないというお話があった。私も同感。長期的展望については、先ほど調騎会からアナウンス効果のお話があり、馬主会からは1千万円くらいの強い馬が買えるというお話があったが、それ以外にも、効果が期待できる方策が具体的にあるか。同時にその期待度、実現度としてその可能性はどのくらいあるものか。

馬主会：基本にお金を掛けないで将来に期待することは不可能と考える。馬を買うにしても購入資金が無い。この3年間、馬主会では馬の購入に1頭100万円ずつ補助しており、15頭くらい活用実績がある。競馬組合でも景気の良い時には5千万円くらいの予算で、1頭250万円くらいの補助を出していた。その頃は1頭500~700万円くらいの良い馬が揃った。馬主会も来年お金が無いので、最後にもう一回補助を実施するかどうか検討しているところ。やれば15人くらい手を上げてくれるが、「岩手競馬は次の年もあるのか。」とやはり聞かれる。今買っても、岩手競馬が無くなれば、走らせることができないことになってしまう。良い馬を買うにしても、何をやるにしてもお金が0では、いくら考えても。

岩手競馬は、日本一の社台グループ所有種馬の種付け権を年間3千万円分以上もらっているが、それを大きなレースの副賞に付ければ、その種付け料が400万円として、賞金が200~300万円としても、実質500~600万円になる。この部分は地方競馬では特別に岩手競馬だけもらっている制度なので、そういったスポンサーが出てきて応援してもらわない限り、今の賞典費の中で馬主が馬を買うということは基本的に不可能。

委員：お金を掛けることによって、その時はマイナスでも、しばらくすると効果が期待できるというものはあるか。強い馬が買える以外にも、設備面などでもあると思うが。

馬主会：北海道競馬が、「A i b a」というミニ場外を多く作っており、これが昨年の北海道の成功の原因だと思う。では、岩手でミニ場外を作る場合はどうかというと、委員のどなたかから、青森、弘前、秋田、仙台などに場外を作るというご意見があったが、基本的に青森県は競馬が駄目。青森は競輪の街。田舎館村にテトラックを出したが結局失敗だった。また、他の市町村も、99%反対運動が起こる。場外を出すまでの過程が難しい。北海道は、馬産地であるせいか、誰一人場外設立に反対しないのでミニ場外を出せる。岩手ではミニ場外一つ作るのにもテトラック一つ作るのと同じ労力が掛かる。

岩手には大通り場外がある。これができたことにより盛岡本場の売上げが減った可能性もあるが、やはり便利。例えば盛岡のショッピングセンターの中に作れば、駐車場もあるし、反対運動も起こらないのではないか。

基本的には構成団体の競馬なのだから、本当は県庁や盛岡市役所の一階でも勝馬投票券を売る

べき。競馬を実施して、利益金を稼いでいるのだから。テレトラックは、安代や宮古、釜石にもあるが、実際には一般管理費を含めれば赤字ではないか。全て精査して、西根や釜石の駅の付近にでも経費の少ないミニ場外を作って攻めていくのが、将来的に残るための方策。

委員：そういう施策を実際に採っていく場合、単年度収支の部分で難しい面もあるが、馬主の立場から見たら、成果が出るまで、例えば5年くらい掛かるとか10年くらい掛かるとか期間的にはどうか。

馬主会：作った次の年から数字として出てくる。

委員：それはミニ場外の話か。市役所や県庁で発売するという話は別として。

馬主会：ミニ場外は絶対黒字になる。市役所や県庁で発売する話は、構成団体がそれだけ本気になれば競馬は発展するのではないか、ということ。

委員：そうすると比較的短期間を見込んでいるのか。

馬主会：絶対にプラスになる。マイナス要素は0。

座長：最初に話があったように、馬を買うにしても来年はどうなるのかということがある。先ほどの調騎会のお話でも、北海道競馬のように、3年間は絶対に運営する、というメッセージが無いとなかなか投資できないということもある。調騎会からも何かアイデアはあるか。

調騎会：馬主会から詳しく話があったので、その件については割愛するが、一つ、我々調教師は、騎手の時代から右肩上がりの時代を経てきた。その頃はテレビなどいろいろな部分で露出が多かった。今はそういう議論も主催者としても資金難ということで、話が進まない。いろいろと取り上げていただいている放送局もあり、感謝しているが、もう少し、露出するような方策を委員の皆さんに考えていただきたい。

座長：なかなか目に触れる機会がない、競馬が一般の人に近いものになっていないというところがあると思う。他にどなたか。

委員：ミニ場外案は、まさにIT化と一緒に進んでいくということ。最小限の追加投資で販売を増やすという点では、これが正に一縷の望み。やはりテレトラックのような大きな施設ではなく、前回申し上げたように秋田県などの空いているビルの一面を借りて、テレビを一台と発券機を置くなど、今度共同トータリゼータの整備が進めばもっと簡単にできるようになるし、我々にとって販売拡大のチャンスだと思う。

座長：意見交換終了の予定時間になったが、委員の皆さんはこの辺りでよろしいか。厩舎関係の皆さんから何かあるか。

馬主会：競馬組合には、ミニ場外を作りたいという気持ちは実際あると思う。大通り場外は実際5千万円くらい掛かっているが、仮に事業費5千万円で新しく施設を設置する場合、地全協から2千5百万円の補助を受けても、残りの2千5百万円は組合が負担しなければならず、考えることすらタブーになってしまっている。ミニ場外やナイター設備を設置する際、補助金の制度はあるが、自己負担分のお金を1円も出せないところは何にも使えないというルール。攻める時にはこういうものが必要であり、一回で消える金ではなく、3年、5年、10年と効果が出るお金である。その辺りの事情をご理解いただきたい。

委員：ミニ場外は、以前からどこの主催者も取り組んでいるが、主催者の自己負担も大変であり、どちらかという民間オーナーに手を挙げてもらい、何%かの歩合で契約して売ってもらう、そういう手法の方が将来的に負担がない。ミニ場外を展開する時には、できるだけ民間オーナー形式の方が良いと思う。主催者の投資も少なく済むので、将来的にミニ場外を展開できれば、

不採算のテレトラックは廃止した方が岩手競馬のためになるのではないか。

委員：競馬組合にお聞きしたい。先ほどの議論の中で商品価値の話が出たが、普通の会社では売れる商品を作り、マーケットに出す。この、売れる商品を作ってマーケットに出すという議論と経営という問題で乖離している感じがするので、最後に一言だけ競馬組合からお聞きしたい。

競馬組合：賞典費についてのお話と思うが、競馬の命はやはりレースであるという認識を我々も持っている。その中で、単年度での収支均衡が競馬を継続していくための条件として私どもに示されている。

そういった中で、我々組合としては、特に、商品の価値を低くするような賞典費の引下げを極力抑制していきたいという考え方のもとに、これまでも様々な工夫をしてきているし、今日ご出席の馬主会をはじめ厩舎関係者の方々に対しても、そういった事情を良くご説明して取り組んでいるところ。これからも経費の削減は避けられない面もあるが、いろいろとやり繰りして、賞典費についてはなんとか水準を維持するような最大限の努力をしていきたいと考えている。

座長：本日は、実際に競馬に携わっている厩舎関係者の方々のご意見を伺うため、四者の代表の方々にお越しいただいた。貴重なご意見、情報をいただき感謝申し上げます。意見交換の内容については、この後の協議の参考としたいので、事務局において整理をさせ、委員で情報共有する。

後半の協議については、5分ほど休憩を取ってから再開したい。

(休憩に入り、厩舎関係者は退席。)

(3) 協議

- ・ 岩手競馬の安定的な経営を図るための課題と検討事項について
- ・ 今後の検討スケジュールについて

松岡競馬改革推進室長から、資料2～3により説明。

座長：事務局において、岩手競馬の安定経営に向けての基本的方向、たたき台をまとめた。これからの議論の中で具体化していく。本日は安定経営に向けた課題と今後の検討事項について議論するが、まず論点整理をして、次に、来月以降の具体的な課題解決の方策についての議論をしたい。これまでの議論をいったん整理した資料となっているが、更に追加すべき点、重視すべき点など発言願う。

委員：2月の議論を待たず、組合としてやれるもの、前倒しできるものは実行していただきたい。特に、薄暮レースの拡大。議論してからではなく、やれるものから、組合の方で実行してほしいというお願いが第1点。

それから、資料3だが、よくまとめている。5年後なり3年後の姿、安定経営に向けた方向を出すことは必要。単年度の収支均衡、これを続けているといつまでも堂々巡りになる。将来の姿を見据えると、若干の追加投資が必要となる可能性が高い。それでも追加投資は認めない、ということか。この検討会議の検討の中で、何らかの制度を提案すればいいと思う。収支均衡を超えるかもしれないが、第三者委員会が一定の追加投資が必要だと認めた場合は、その限りではない。ただし、血も出すことも必要。血を出す代わりに追加投資を認める。追加投資の問題は、安定経営の基本的方向を考える際には不可避。どの程度の期間にするか、どのような方法が良いかなど、一定の歯止めは必要だが、その辺を盛り込む必要があると思う。

座長：すぐ始められるものは整理して、次回にも示してほしいということと、資料3のたたき

台について、追加投資について記述するということか。このままではじり貧で下向きのスパイラルに陥るということは、これまでも委員の皆さんからご指摘の点だが、上向きにするためには、追加投資が必要というご意見。

委員：今の追加投資に関連しての話だが、収支均衡というルールを認められた経緯があり、これを覆すのは、県民の理解を得るためのアピールが必要で、かなり高いハードル。そのためには、5年なりの、実現可能で説得力のある経営計画が必要。最初にこれだけ先行投資をすれば、後半にはこれだけの効果があるという、説得力を持った計画が不可欠。組合としても、責任を負うことになる。すぐには無理だとしても、たたき台として何か示していただければ議論が進むと思う。

座長：投資の中身とプランニングが明らかにされるべきとの意見。

委員：5年後をめどにしたプランは以前にもあったが、地に足がついた計画ではなかった。

今回は、例えば、160億円まで売上が下がるという前提で、施設、設備を整備、更新するためにこれだけかかるので認めてほしい、というものを、実現性のある形で県民に対して提示すべき。自分たちの身を削っても投資が必要で、そうすれば5年後にはこれだけのプラスの見込みが立つ、という現実的なものを発信すべき。それが一番のプラスイメージになると思う。今までのマイナスイメージは、大変な状況なのに、いろいろなものに縛られて何もできないということ。結果として賞金を下げれば、ファンが離れるのは当たり前。そうではないということを発信することが、一番のプラスイメージ。プラスイメージとは何なのかということをもう少し考えて、例えば5年間の計画というものを示せばいいと思う。

委員：追加投資を認めてもらうためには、相当な抵抗があると思う。県民の納得を得るには、投資することで330億円が返せるような計画が必要。今のままでは、330億円は悪いスパイラルに陥って、返せなくなる。それよりは、積極策で追加投資することで返す見通しができるのだ、ということを行わなければならない。これは、かなり厳しいことだと思う。しかし、この委員会では、それを目標にしなければならない。そのためにも、コストの問題、一場・二場論、これは早く終止符を打たなければならない。今までの議論で出てきた論点、例えば、水沢では耐震補強にどれだけかかるかなど示してほしい。

座長：関係者との意見交換の中で、開催の日数の問題などあったが、そうしたシミュレーション、どの程度の投資が必要か、どの程度のプラス要因、マイナス要因があるのか、といった数字を入れた議論が必要ではないか、というご指摘。

委員：一場化の検討については、これだけコストがかかるからできない、という結論が一応でているので、論議がそこで止まってしまう。一方で、アンケートで、一場化できなくてどうする、といった結果が出たりすると、県民の中でもイメージがどんどん悪くなる。

何もできません、と言うことがマイナスイメージになる。プラスイメージに変えるには、それを逆手にとって、一場化をすればこれだけ経費が助かる、そのためには投資が必要ですよということが言えればいい。それを検討できる材料を出してほしい。

座長：何も示さずにアンケートしても、二場はやはり無理だという結論になってしまう。

委員：先ほどの一場・二場の話は、一場ありき、ということではない。正確なデータに基づいて議論すべきだし、終止符を打つ、というのは、方針を明らかにするべきということ。

座長：資料3のたたき台の考え方か。ここに盛り込まれていない考え方についても、いろいろご意見があった。他にはないか。

委員：マーケットの拡大ということについて、外国人旅行者は大きい。それから、ミニ場外は

必要。こうした、最少の投資で最大の効果を生む方法がポイントになるのではないか。

委員：たたき台についてだが、岩手競馬は、単年度の赤字で廃止、ということが絶対的な前提とされている。しかし、この検討会議は、その枠の中で考えていては何もできないので、5年後の姿を考えるべき。説得力のある投資はどうしても必要。それが単にスタンドの改修等では発売につながらないが、マーケットの拡大というのは非常に大事。それにつながるような初期投資を一定期間、一定額認めてほしいということを、この検討会議で提言することで、構成団体も考えてくれるのではないか。こういう目的で、こういう発売の増が見込める、ということ具体的に示したらどうだろうか。もちろん、お金をかけないでできることもいろいろあると思うが。

先ほど話題にあったミニ場外でも、民間オーナーを募集したとしても機器は主催者が用意しなければならぬケースもあり、やはり若干の投資は必要になる。こういう視点でミニ場外をこれだけ設けたら、これだけの発売額が見込める、これだけの投資が必要でも一定期間で回収できる、そういう具体的なものを示せば、説得力があると思う。

薄暮レースにしても、照明をもう少し明るくしなければならぬとか、マーケットの拡大につながるような投資というのは、説得力があるのではないか。そういう投資の方向性をこの検討会議で見出せばいいと思う。

委員：IT化の投資も必要だと思う。

座長：全く投資することなしでは難しい。投資もタブー視しないで記述してもらえればと思う。

次回以降、課題解決の方策の検討となるが、第4回会議では、情報発信、集客・ファン拡大、JRAとの相互発売がテーマとなる。数字を盛り込んだ資料は、今回は間に合わないか。

事務局：いま、どういう資料を出すことができるか検討中。

座長：理想だけではない、地に足の着いた数字、投資額と効果を示してほしい。他の先行事例なども踏まえ、数字を基にした議論ができればと思う。

また、来年度から始められることについては、それを整理して提出願う。

委員：IT化はやはり大きいと思う。自場発売は最も利益率が高いが、来場者が減る中では、携帯電話での投票を無視できない。極端な話、競馬場ではレースだけ実施して、馬券の購入は全て場外ということにもなりうる。IT化対応の位置付けをもっと大きくしないと理解が得られないのではないか。IT化で競馬の性格も大きく変わってくると思う。自場で馬を見て買うよりも、インターネットでの購入が主になる。これはチャンスでもある。商売上の話だが、売ってくれる人にはどんどん売ってもらおう。そういうことも強調してもらいたい。

座長：5年後の姿がどうなっているか。競馬場での投票を重視するか、自宅での投票をとるか、そういう近未来のIT化も見据えながら議論しなければならないと思う。

委員：基本的に、今までの議論に同感。それを前提として、私の中では、今後の岩手競馬の方向は、3つの方向が考えられると思う。

タイプ1は、いろいろな条件が揃って、とにかく努力することで経営していけること。しかし、これは多分、無理ではないか。

タイプ2としては、いま議論のあった追加投資など、ある程度血を流しても現状の制約あるいは状況を変えながら、やや長期的に考えていくこと。

タイプ1と2は、競馬事業という枠組みの中での発想である。

もしそれでだめなら、タイプ3として、従来の競馬とは違う発想のもとで考えることも必要。例えば、福祉や観光など、競馬事業の枠組以外のものと連携していく。その場合は、もっと上位

の枠組みから括る必要がある。大きな括りの中に競馬もある、という概念で考えるべき。

基本的には、ここまでの議論のとおり、タイプ2までで成果が出れば良いが。

座長：タイプ3は、仮に投資するにしても、別の観点、別の事業から、という視点か。

委員：構成団体である県、市は、競馬事業だけしているわけではない。もっと上位の概念から考えることも、有効かつ必要ではないかと考える。

委員：資料3「岩手競馬の安定経営に向けた基本的方向」でも、「岩手競馬は、守っていくべき県民・市民の大きな産業である」ということを謳っておかなければならないのではないかと。競馬もひとつの産業であり、地元のみならずうまくやっていくのだと。経費がかからないからと言って、身近でない、よそでやっているギャンブルで潤ってもしようがないのであって、地元でみんなうまくやっっていこう、ということを経営に据えておかないといけないのではないかと。

座長：今後の方向性について意見をいただいた。次回から数字を入れて、追加の投資もタブー視せずに積極的に盛り込んでいこうということだと思う。そういう点で、長期的な数年後の姿を検討することも必要であるというご意見があったと思う。

委員：商品価値、売れるレースを作る、という話があった。賞金は広く浅く、たくさんのレースをすべきか、絞り込んで高額賞金のレースを実施するのか。どちらが収入が増えるか。5年後の話題とは違うが、これも課題ではないか。

座長：支持されるレースづくり、商品づくり、それを経営的に考えた時にどうか、ということ。その辺も意識して、次回以降、プランニングに役立つような情報提供をお願いしたい。

時間が近づいてきたので、この辺でまとめとしたい。

ご意見を踏まえて、事務局には次回の資料準備等をお願いしたい。

具体的な検討課題に数字が入って、数年後の姿がイメージできるようなたたき台を用意していただければと思う。

(4) その他

事務局から、第4回検討会議を2月21日に、第5回検討会議を3月18日に開催したい旨説明

(5) 閉会